揺れる学校現場、脱マスク浸透せず　「熱中症よりコロナの方が…」

2022/6/29 毎日新聞

下校前、教諭からマスクを外すよう促される小学2年生の子どもたち＝名古屋市西区の市立比良西小学校で2022年6月29日午後2時33分、田中理知撮影

新型コロナウイルス下の日本列島が記録的な暑さに見舞われるなか、学校現場が「脱マスク」を巡って揺れている。熱中症リスクが高まるとして、文部科学省は登下校時や体育の授業などでマスクを外すよう繰り返し求めているが、梅雨が明けた地域でも徹底されない。コロナの感染などを恐れ、着用を望む子どもや保護者の意向を無視することはできないからだ。

名古屋市立比良西小学校（同市西区）では、29 日午後 2 時半ごろ、下校前に校庭の一角に集まった 2 年生に、女性教諭が「きょうはとても暑いので命の危険があります。マスクを外して帰りましょう」と促した。

この日は、愛知県に今年初めて「熱中症警戒アラート」が出され、市内の最高気温は 37・5 度に達した。それでもマスクを着けたまま校門を出る子どもの姿もあった。その一人に外さない理由を尋ねると「熱中症も怖いけど、コロナの方がもっと怖い」と答えた。

1 組担任の小島百乃教諭（23）は「暑い屋外から戻った時は、周囲と話さないという条件で 2、3 分はマスクを外すよう声

がけしたり、授業中の水分補給を促したりしている」と話す。
文部科学省は 10 日、各教育委員会などに、部活動の運動中や体育の授業では屋内外を問わずマスクを外し、登下校時なども着けないよう指導を徹底することを求めた。外す際は近距離の会話を控えるなど工夫する。5 月も周知を図ったが、マスクを着けたまま運動し熱中症の症状で救急搬送される事例が相次いだため「各教委に浸透させるには繰り返し説明するしかない」（担当者）と改めて促した。
　ただ、同校の松藤耕造校長（55）は「マスクを着けるかどうかの判断は本来、任意なので『マスクを外しなさい』とは言えない。ただ、これだけの暑さなので、子ども任せにもできない。外してよいタイミングを教えたり、大人が外している姿を見せたりすることも大切だ」と難しさを語る。
気温が高まるにつれ、学校で「脱マスク」の動きは広がりつつあるが、現場の取り組みはまちまちだ。川崎市は体育の授業時など会話のない場面では、教員が率先してマスクを外すよう各校に周知。市教委の担当者は「先生がマスクを着けていると、子どもも外しにくい。不要な場面で外すことが大切だ」と説明する。
　一方で「マスクを着けたい子どもも尊重する必要がある」として、外すのをためらう子どもが体育の授業に参加した場合などは、教員らが体調に変化がないかを注視したり、涼しい場所で休ませたりしている。
市内で開かれた体育大会や体育の授業で、熱中症の症状を訴えた子どもが搬送される事故が相次いだ大阪市も教員にマスクを外すよう通知を出した。市教委は「教員も同様に熱中症の恐れがある。リスクが高いと判断した場合は外してもらいたい」とする。
東京都足立区は 6 月の文科省通知を受け、区立小中学校の保護者宛てのメールで、熱中症リスクの高い夏場はマスクを外すよう子どもに声がけすることを求めた。だが、基礎疾患を持つ家族との同居などで感染リスクを心配する保護者の声ばかりでなく、子どもが恥ずかしがってマスクを外したがらないケースもある。

下校前、教諭に暑いかどうかを尋ねられて手を挙げる小学2年生の子どもたち。マスクを外すよう促されても、着けたままの子どももいた＝名古屋市西区の市立比良西小学校で2022年6月29日午後2時33分、田中理知撮影

　感染拡大から約 2 年でマスク生活が日常になり、他人に素顔を見せる機会も減った。ネット上などでは下着を脱ぐのと同じようにマスクを外すのが恥ずかしいという「顔パンツ」との言葉さえ飛び交う。区の担当者は「教員の指導でマスクを外しても、恥ずかしがって口元を手で覆ってしまう児童もいる」と明かす。
　足立区では、学校でマスクを外しやすい環境づくりなどを求めて、保護者らが区議会に請願を出す動きもある。区議の一人は「マスク生活が続き、学校では着けずにいられなくなった子どももいる。『人前で外してもよい』ということを経験してもらわなければ、いつまでも外せなくなってしまうのでは」と心配する。

葛飾区の保育園に 3 歳の男児を通わせる女性は「自分の子は園内で外すことができるようになったが、近所で見かける集団登校の小学生はどの子もマスクを着けている。『みんなが着けているから着ける』という意識がまだまだ強いのでは」と話した。

熱中症対策や学校保健に詳しい奈良教育大の笠次良爾（かさなみりょうじ）教授（医師）は「夏場に熱中症と新型コロナのリスクをてんびんにかければ、熱中症の方が、死亡など最悪の事態を招くリスクが圧倒的に高い。『ゼロリスク』を目指さないでほしい」と指摘する。マスク着用には弊害もあり「子どもや保護者には、科学的根拠を示してマスクなしでも大丈夫な場面があることを納得してもらう必要がある。ただ、日本では周囲がどうしているかが判断基準になりやすく、論理的に考え自ら判断するスタイルはすぐには広まらないだろう。まずはより高いリスクを回避することに注力するしかない」と話した。【李英浩、田中理知、深津誠、国本愛】